

平成12年度企画展

# くらしの水

～収蔵資料にみる富士見の水利用～



富士見市立難波田城資料館

## 開催にあたって

“水”は、人が生きていくうえで、なくてはならないものです。飲み水をはじめ、お風呂やお手洗いなどで国民一人が一日に使う生活用水は320リットル以上で、毎年増加する傾向にあるといわれています。

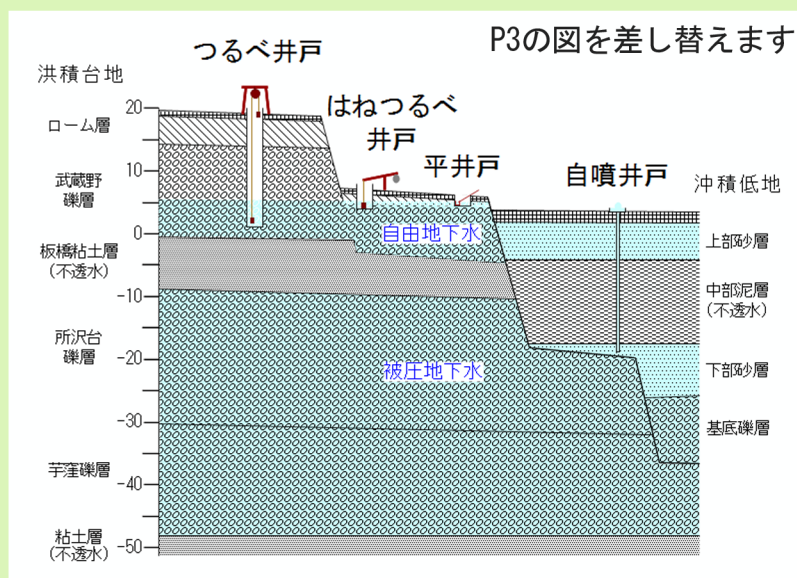
現代では、蛇口をひねりさえすれば、簡単に大量の水を手に入れることができますが、一方では毎年のように水不足が心配されています。

今回の企画展では、富士見市の人びとと水との関わりを、水道が普及する以前の時代を中心に、民具や古文書の収蔵資料などから探ってみたいと思います。21世紀を迎えた節目の年に、先人の暮らしぶりにふれていただく機会となれば幸いに存じます。

最後に、開催にあたり貴重な資料をご提供いただいた所蔵者各位、並びに実施にあたってご指導・ご協力を賜りました関係者各位に、厚くお礼申し上げます。

平成13年 2月10日

富士見市立難波田城資料館



## 【目次】

開催にあたって

目次・例言

### I 水を得る

1. わき水、井戸、水道～取水方法の変遷～
2. 井戸の種類と地形
3. 井戸掘りと管理

### II 水を使う

1. 生活の水
2. 田畑の水
3. 生業の水

### III 水を願う

1. 井戸神様
2. 雨乞い

展示資料一覧

写真資料一覧

参考文献

資料提供者・協力者

## 【例言】

1. 本書は、富士見市立難波田城資料館平成12年度企画展「くらしの水～収蔵資料にみる富士見の水利用～」の展示解説パンフレットです。企画展の開催期間は、平成13年2月10日（土）から3月11日（日）までです。
2. 本企画展の開催にあたり、多くの方々から、資料のご提供や聞き取り調査へのご協力、またご指導・ご教授をいただきました。厚くお礼申し上げます。
3. 本企画展の展示および本書の執筆は、資料館職員が行いました。

# I 水を得る

## 1. わき水、井戸、水道～取水方法の変遷～

富士見市の地形は東西に大きく分けることができます。西側は標高20m前後の武蔵野台地、東側は標高6～8mの荒川低地です。台地と低地の境にはわき水のでている場所が数多くあります。

原始・古代の人びとはわき水や小さな川の近くに住んでいました。時代が新しくなるとともに、水源から離れたところにも住むようになった人びとは井戸を掘りました。市内で発見された井戸跡は古代のものももっとも古く、中世・近世のものになると数が多くなります。その後、昭和40年に富士見町が水道の給水をはじめると、井戸は人々が水を得るための主要な設備でした。

昭和3年生まれの女性は、初めて水道の水を使ったときの気持ちを次のように話してくれました。「楽だったわねえ。こんな便利なもんかと思ったけど、“水は買うモンじゃない”と思ってたの。今度は買わねえじゃなんないなと思ったね。」水道がそれぞれの家にひかれたことは、印象深いできごとでした。

### ★ポイント★

#### ①富士見市の地形とわき水

市内には約30カ所にわき水があることが確認されています。展示パネルの図は、昭和62年度に富士見市民大学で実施した調査データをもとに、わき水が台地と低地の中間にあたる斜面の場所にあることを示しています。

#### ②市内遺跡の分布

市内の原始・古代遺跡の分布から人々が水を得やすい場所に住んでいたことがわかります。

#### ③井戸跡の出土例

市内の遺跡から発掘された井戸跡は奈良平安時代のものが最古です。中世・近世の時代のものになると数が多くなります。

#### ④水道の布設

富士見市では、昭和40年に富士見町上水道事業により給水が開始されました（※1）。しかし、普及は一気に進んだわけではなく、昭和41年度では49.0%、昭和48年度に97.1%となりました。現在でも井戸水を使用している家庭は少なくありません（※2）。

（※1）町営の水道にさきがけて、東大久保の修徳地区では昭和38年に簡易水道組合が結成され、地区内の38戸に水道による給水がされた。当地区は当時、伝染病発生件数が非常に多く、その原因が井戸水にあったことから簡易水道の実施が住民によって進められた。このことが町営水道（当時は富士見村）の布設時期

を早めるきっかけともなったようである。(大沢二三重「聞き書き 町営水道の先がけとなった東大久保修徳の簡易水道組合」〔南畑公民館建設十五周年記念事業実行委員会 1978〕)

(※2) 富士見市では、上水道が使用不可能となる災害時を想定し、飲料水・生活用水として使用するための井戸を新たに市立小学校・中学校などに設置し、一般家庭で現在使用している井戸についても水質検査のうえ災害時飲料用井戸として登録をしている。平成12年4月現在で92の井戸が登録されている。

## 2. 井戸の種類と地形

一口に「井戸」といってもさまざまな種類があります。富士見市で大正時代から昭和30年代くらいまでの時期に使われていた屋敷の井戸には、少なくとも4つの形がありました。これは地形のちがいによるものです(図参照)。

台地では、井戸車を使い井戸縄に付けた桶で水をくむ「つるべ井戸」が使われました。これは深さ10m前後の井戸でした。低地では、勢いよく水を吹き上げる「自噴井戸」でした。台地と低地の中間にあたる標高9~15mのところでは、深さ10m未満の浅井戸が多く、桶やバケツをつけた竹ざおや縄を先に結びつけ、テコの原理で水をくみ上げる「はねつるべ井戸」がありました。また、水のわく池を利用した「平井戸」もありました。

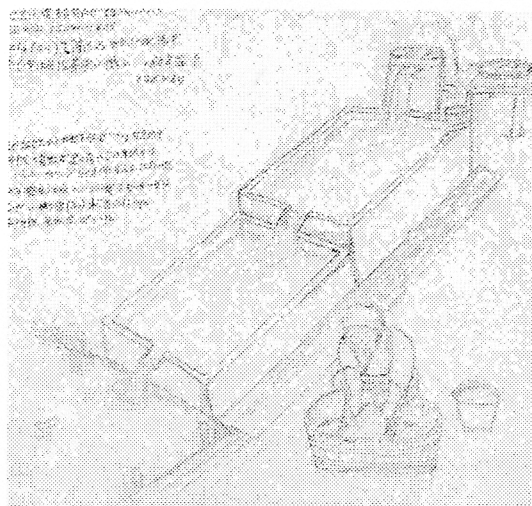
昭和10~30年ごろには、井戸は手押しポンプになりました。さらに昭和30年代以後は地下水位が下がったこともあり、モーターポンプにかえる家もふえ、水をくむ作業が楽になりました。



▲はねつるべ井戸

(八木橋信吉氏撮影、さいたま川の博物館提供)

▼南畑の自噴井戸 (画 渋谷喜太郎氏)

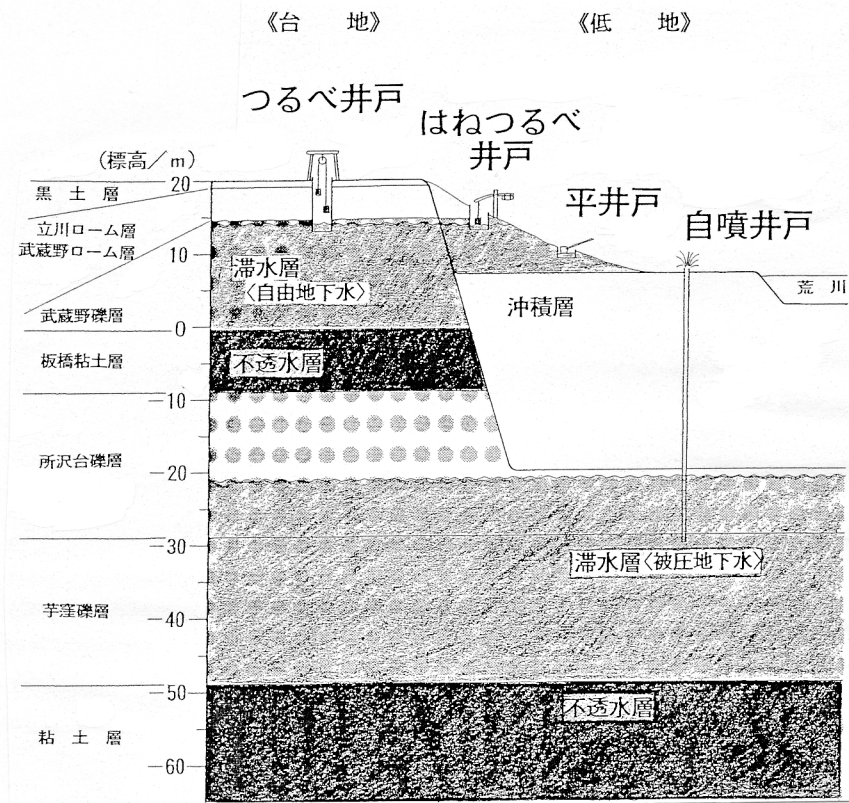


★ポイント★

①富士見市の地形と

井戸の種類

表紙の裏にこの  
図の差し替えが  
あります



市内の鶴馬や水子など台地の地下地質は、地表面から黒土層(1m未満)、ローム層(5~7m)、砂礫層(10~20m)、粘土層(5~10m)が、さらにその下には安定地盤である砂礫層(~深度70m)、粘土層が堆積しています。武蔵野台地は、今から数十万年前、多摩川が形成した扇状地のうへに、富士山や箱根の山の火山灰が積もってできたものです。地中にしみ込んだ水は、水を透しにくい粘土層の上をたまるように東に流れています(このように水のある層を滞水層といいます)。台地上では10数m掘れば、滞水層に達します。その水を汲み上げるには「つるべ井戸」を使いました。

一方、南畑などの低地では、およそ30m掘ると滞水層に届きます。地下水には、圧力のかかっていない「自由地下水」と圧力がかかった「被圧地下水」がありますが、いちばん地表に近い滞水層の水は自由地下水で、その下にある滞水層の水は被圧地下水です。すなわち低地で掘った井戸の水は被圧地下水なので、つねに水が地上に吹き出してくる「自噴井戸」だったわけです。水をくみ上げる必要はありませんでした(※1)。

台地と低地の中間にあたる場所では、地表が自由地下水の滞水層に近いので、井戸も深さ10mに満たない浅井戸でした。竹の先に手桶やバケツをつけたもので人がじかに水をくんだり、あるいはそれを丸太の先端につけた「はねつるべ井戸」でくみました。長い縄などを使う必要はありません。また、場所によっては水がわき出る池を井戸として利用した「平井戸」もありました。ここでは柄の長い柄杓などで簡単に水がくめました。

(※1) ただし、低地のすべての井戸が深く掘った井戸だったわけではない。場所によっては「宙水」という地下の水たまりのような滞水層の水を使った浅い井戸もあった。このような水の水質はあまり良くなかったので、くんだ水は木炭とシュロの木の皮を入れた桶に入れ、桶の下部につけたそそぎ口から出る、ろ過された水を使った。

### 3. 井戸掘りと管理

井戸は、屋敷に掘るものと灌漑のため水田に掘るものがありました。井戸を掘るのは専門の職人がおこないました。低地では20間（約36m）ほどの深さまで掘れば水が吹きだしましたが、より質のよい水を得るために50間（約90m）まで掘る家もありました。50間を掘るのには1カ月以上かかりました。井戸は冬季に掘ることが多く、特に水田に掘った野良井戸では農作業が始まる4月に間に合わせるようにしました。

「戌亥便所に辰巳井戸」といわれるように、井戸は主屋の東南方にあることが多いのですが、台所に近い主屋の裏側にある家も少なくありませんでした。

「井戸を掘るか、蔵を建てるか」というほど井戸掘りにはお金がかかるため、井戸のない家もありました。そのような家では井戸のある近所の家から水を分けてもらいました。

また、台地の地域では、井戸を管理するため、近隣でつくった組で共同作業をしました。それは井戸カイと井戸縄の縄ないです。井戸カイとは、井戸水をすべてかい出してゴミを掃除することで、毎年1軒ずつ、夏におこなわれました。

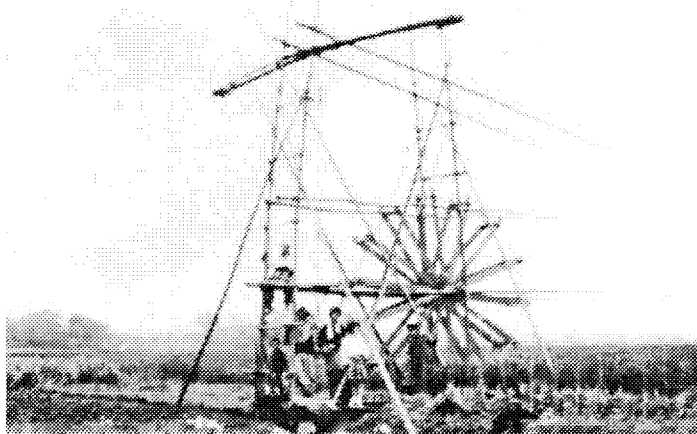
#### ★ポイント★

##### ①井戸を掘るには費用がかかりました

展示した古文書資料からも井戸掘りには費用がかかったことがわかります。

文政4年（1821）5月の「乍恐以書付奉願上候（井戸掘り金子拝借願）」（大澤誠一家文書38）は、大久保村の村人が、干ばつによる水不足のため、新たに井戸を掘る金銭を20両借用したいと幕府の代官に願い出たときのものです。

同じく文政4年11月の「当巳突貫き井戸鉄棒新規拵金割合帳」（大澤誠一家文書624）は、井戸を新しく作るための費用を大久保村の村民にわりふった代金などを書き留めたものです。



▲市内勝瀬での井戸掘り（内田テイ氏提供）

## II 水を使う

### 1. 生活の水

水は生活のさまざまな場面で使います。その水を井戸からくんで運ぶのはたいへんなことでした。台所の水ガメには飲み水や炊事のための水をためておき、お風呂の水をいっぱいにするために何回も往復しました。水くみは、家事をする女性の仕事でしたが、子どもも手伝いました。

苦労して運んだ水はむだには使えません。毎日使う食器は毎回洗うものではありませんでした。お風呂の残り湯もただ捨ててしまうのではなく、肥やしにするために堆肥場にかけて、畑にまいて利用しました。

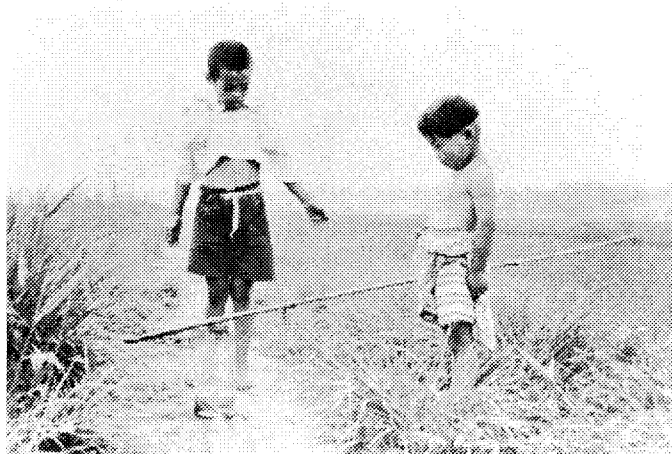
家の井戸のほかにも、わき水のある場所や川岸が共同の洗い場となっていたところもありました。衣類を洗濯したり、野菜などを洗いました。

また、昭和30年代ころまでは川の水はきれいで、水泳、魚取り、シジミ採りなど、子どもたちの絶好の遊び場でもありました。

#### ★ポイント★

##### ①自噴井戸の井戸ガワ

井戸水の使い方に関しては、低地の自噴井戸の形にも工夫がみられました。この井戸は、吹き出した水をうける井戸ガワという枠を2～3段並べていました（2頁図参照）。高さの違う井戸ガワには上から順番に水がたまり、そこからあふれた水が下の井戸ガワに落ちる、というしくみになっています。それぞれの井戸ガワにたまった水はおおよその使い道が区別されていました。いちばん上の水は、飲み水や煮炊きに使う水、次は衣類の洗濯に使う水、いちばん下では煤のついた鍋や釜、あるいはドロのついた野菜を洗ったりしました。効率よく水を使うしくみになっていたわけです。



##### ▲魚とり

(市内水子 荒井正雄氏撮影)

難波田城公園の古民家ゾーン、旧鈴木家表門と穀蔵の間にある復原井戸はこのような自噴井戸をモデルにしました。(水は水道です。)

##### ②古民家にも展示資料があります

特別展示室に展示した資料以外にも、「水を使う」民具資料が公園内でみることができます。旧大澤家住宅には五右衛門風呂、旧金子家住宅には水ガメと手桶、納屋の下屋下には大きな水ガメ、そして洗い場にはタライがあります。また、長屋門展示室には風呂の残り湯を堆肥にかけるときなどに使った肥柄杓が展示されています。



## 2. 田畑の水

作物にかかせない水をどのように確保するかは、人びとにとってたいせつな問題でした。

富士見市周辺では、原始・古代の人びとは、台地ではおもに谷戸（小河川によって台地につくられた谷間の低湿地）で直播きや摘田等の水田を、低地では荒川と新河岸川によってつくられた自然堤防の上に畑作をおこなっていました。これらはわき水や雨水を用水としていました。

江戸時代の中ごろになると、大規模な開発がおこなわれ、低地では用水堀が多くつくられ、広大な水田地帯となりました。

『新編武蔵風土記稿』によれば、水子村は「用水八柳瀬川及ヒ村内処々ノ清水ヲ引」、鶴馬村では「用水八村内ノ池或ハ大井町ヨリ清水ナトヲ引キテ沃ケリ」とありますが、水は不足がちで、しばしば干ばつとなりました。また、低地の村々では、伊佐沼から用水も引きましたが、それでは十分でなく、雨水にたよることもありました。その一方、毎年のように洪水に苦しめられ、取水と同じように排水をすることも重要な課題でした。

### ★ポイント★

#### ①伊佐沼用水路

低地の南畑地区は毎年のように洪水に悩まされた地域ですが、一方では田畑の水は不足するところでもありました。江戸時代の元禄年間、下南畑村の名主であった小山作兵衛が周辺の川越領24カ村と相談し、伊佐沼（川越市）より用水をひくことを計画しました。作兵衛は領主松平伊豆守信輝にこの計画を願い出て許されました。この用水堀の工事にまつわる逸話があります。作兵衛は寝食を忘れるほど働き、好きな酒も断ち、自分は下戸だといって一滴も飲みませんでした。用水堀の工事が終了し、領主に報告に行くとほうびに酒を賜わりました。すると、作兵衛はグイグイ飲んだので、領主は驚き「南畑下戸に酒3升、強いて飲ませばまた3升」と言ったといひます。

#### ②水は“難”物でもありました

南畑地区では、江戸時代以前から各所に堤防をつくるなどして水害対策をしていましたが、完全には防ぐことはできませんでした。江戸時代の中ごろ、村人は「難波田」という地名が災いしているのではないかと村名の変更を代官に願い出て、現在の「南畑」という字に改められました。しかし、大きな水害がなくなったのは昭和になり、荒川や新河岸川の河川改修などが済んでからのことでした。



▲ミズグルマで田に引水  
(埼玉県立さきたま資料館提供)

### 3. 生業の水

かつての富士見市には、わき水や川の豊富な水を利用した職業がいろいろとありました。江戸時代には、新河岸川の舟運に関わる職業のほか、水車業、染織業、製氷業、酒造業などがありました。

水車業は、水車をつかって米や麦などを精穀し、手間賃をうけとる商売です。江戸時代には鶴馬村の7カ所に水車が置かれていました。水車の場所は、大きな川よりも用水や小川など一定の水量があるところがよいといわれ、鶴馬村でも谷戸を流れる小川を利用していました。昭和の初めころには水車もだんだんと少なくなり、昭和20年に最後の水車もなくなりました。

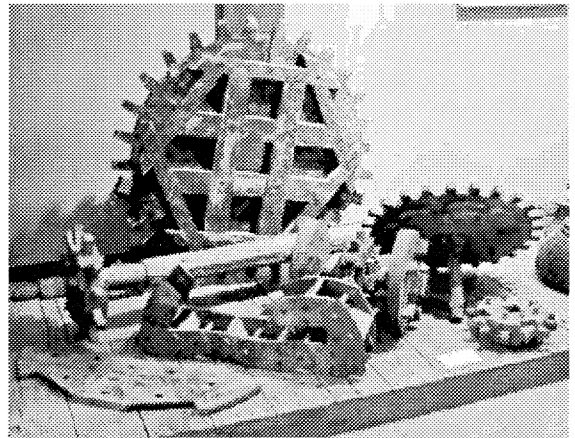
明治の初めには水子で製氷業がおこなわれました。天然のわき水や井戸の水を製氷池で凍らせてつくった氷を、新河岸川の舟運で東京に出荷していました。

#### ★ポイント★

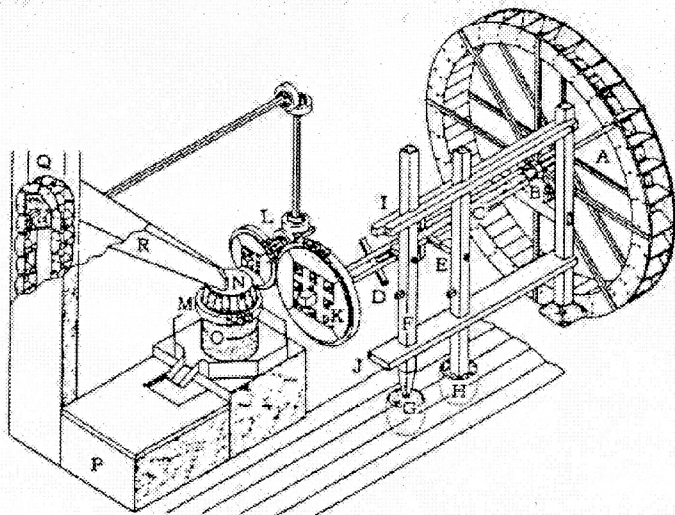
##### ①市内に残る水車の部品

展示した水車の部品は、市内鶴馬の横田正志さんからお借りしたものです。横田家には江戸時代から昭和9年まで水車小屋がありました。小屋の中には、米や麦を精穀するための杵が10本ほど並び、また、粉ひき臼をまわすための仕掛けもありました（図参照）。

旧金子家住宅前にある納屋の下屋下に、中央が丸くくぼんだ四角い石がありますが、これも水車小屋で精穀につかわれた搗き臼です。



▲水車部品（横田正志氏蔵）



▲精米製粉用水車の構造（出水力『水車の技術史』より転載）

### III 水を願う

#### 1. 井戸神様

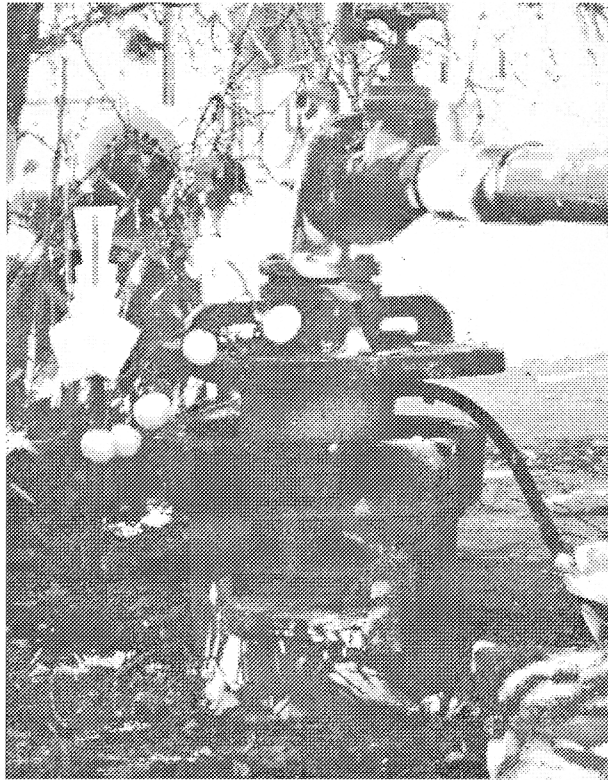
「井戸はそまつにするもんじゃない」「井戸のタタリは怖い」・井戸には井戸神様がいて、大切に扱われてきました。

正月には幣束やお供え餅などが供えられました。元日の早朝には若水くみという行事があり、年男が風呂に入って身体をきよめてから、くんだ井戸水を神棚に供えました。お七夜には、嫁の実家の母親が赤ん坊をだいてオムツをかぶせ、オサンゴ（米）と御神酒を盆にのせて井戸神様とセッチン神様（便所神様）にお参りしました。使わなくなった井戸をうめるときには、井戸神様のために息ぬきの筒を立てておきました。

#### ★ポイント★

##### ①井戸にまつわる言い伝え

井戸にまつわる言い伝えとしては、次のようなものもあります。モノモライができたときには味噌コシを井戸に半分だけかけ「治してくれたら全部見せる」と言えばよいといいました。また、節分に家の中に撒いた豆の中で、いちばんきれいに3粒が一行に並んだ豆を井戸の中に入れると、井戸の水が良い水になると言われました。



▲井戸神様 (市内東大久保 時田佐左衛門家)

## 2. 雨乞い

日照りの年には雨乞い祈願がさかんにおこなわれました。富士見市では相模の大山（神奈川県）や上野の榛名山（群馬県）、信濃の戸隠山（長野県）などに参拝して水を持ち帰り、村の神社や水源地などにまいて水の恵みを祈りました。

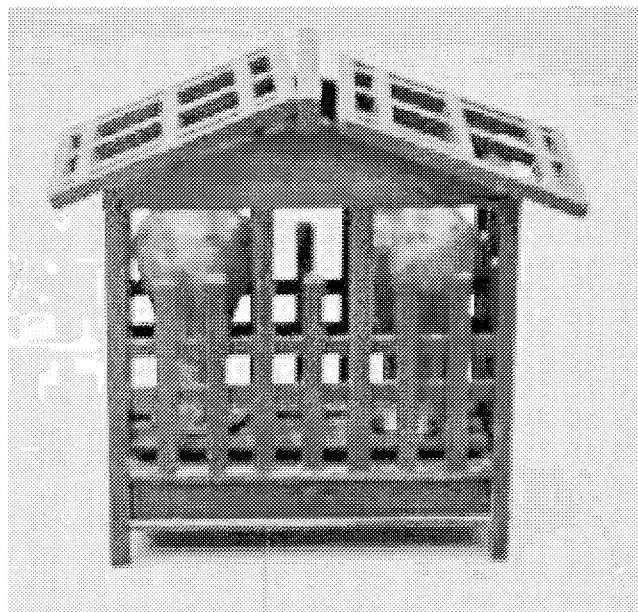
また、柳瀬川の河原ではだかの男性が題目をとなえながら水をかけあったり、観音堂に年配の女性たちが集まって念仏をとなえた地区もありました。また、勝瀬の榛名神社は、雨乞いにご利益のある神社として遠方からも信仰を集めていました。

しかし、長い間水害に悩まされてきた南畑地区では「雨乞いはしてはいけないもの」とされていました。

### ★ポイント★

#### ①大山様

展示した「大山様」は、水子永久保組で使われていたもので、大山からいただいた水を持ち帰るための徳利とその付属用具です。同様のものは水子東組でも使われていました。江戸時代のおわりころから使われていたと推定されます。いただいた水を徳利に入れた「大山様」を腰に下げ、体力の続く限り走り続けたと伝えられています。



▲大山様 (市内 水子永久保組寄贈)

## 【展示資料一覧】

	資料名	所蔵者(敬称略)	寄贈者(敬称略)	旧使用地	備考
＜水を得る＞					
1	井戸掘金子拝借願(1821)	大澤誠	*	市内東大久保	寄託資料
2	当巴突抜井戸鉄棒新規拵金割合帳(1821)	大澤誠	*	市内東大久保	寄託資料
3	水車土普請人足出覚帳(1821)	横田正志	*	市内鶴馬	寄託資料
4	借用金子証文之事(1809)	横田正志	*	市内鶴馬	寄託資料
5	鶴馬村水車設置願(1827)	横田正志	*	市内鶴馬	寄託資料
6	井戸車	当館	鈴木秋次郎	市内針ヶ谷	再現展示
7	井戸縄	当館	斉藤登美雄	市内渡戸	再現展示
8	つるべ井戸の桶	当館	平塚和男	市内水子	2点
9	イカリ	当館	萩元保夫	市内水子	
10	井戸車	当館	高橋覚次	市内水子	
11	井戸車	当館	神山道子	市内針ヶ谷	
12	井戸ポンプ	当館	細田菊寿	市内針ヶ谷	
13	井戸ポンプ	当館	金子正寿	市内羽沢	
14	水桶	当館	金子茂	市内上沢	
15	てんびん棒	当館	金子茂	市内上沢	
16	井戸縄の縄ない機	横田正志	*	市内鶴馬	
17	地層縦断表	富田設備工業所(有)	*	市内鶴瀬東	4点
＜水を使う＞					
18	手桶	当館	平塚和男	市内水子	
19	タライ	当館	神山道子	市内針ヶ谷	
20	洗濯板	当館	平塚源之助	市内水子	
21	洗濯機	当館	山中一夫	市内上南畑	
22	洗面器	当館	神山道子	市内針ヶ谷	
23	人参洗いのタワシ	当館	平塚和男	市内水子	2点
24	湯たんぼ	当館	渋谷進	市内上南畑	
25	湯たんぼ	当館	水村喜弘	市内下南畑	
26	ひよこの水飲み	当館	朝倉倬弥	市内下南畑	
27	箱膳	当館	平塚和男	市内水子	
28	風呂桶	当館	柳川一郎	市内下南畑	
29	片手桶	当館	平塚和男	市内水子	
30	ジョレン	当館	荒井兼吉	市内水子	
31	スイコ	当館	平塚源之助	市内水子	
32	ミズグルマ	当館	斉藤登美雄	市内渡戸	
33	ウナギカキ	当館	増田辰夫	市内水子	
34	ヤス	当館	荒井兼吉	市内水子	
35	ビク(大)	当館	新井勝吉	市内東大久保	
36	ビク(小)	当館	高橋覚次	市内水子	
37	ウケ(ナマズ用)	当館	高橋覚次	市内水子	
38	ウケ(ウナギ用)	当館	橋本能造	*	製作資料
39	ウケ(ドジョウ用)	岡田栄子	*	市内下南畑	
40	ウケ(ドジョウ用)	当館			
41	水車部品	横田正志	*	市内鶴馬	7点
＜水を願う＞					
42	大山講御神体	当館	水子永久保組	市内水子	
43	大山講人数覚帳(1824)	横田正志	*	市内鶴馬	寄託資料
44	御用御触書写帳(1838)	大澤誠	*	市内東大久保	寄託資料
45	渋谷喜太郎氏のスケッチ	渋谷明芳	*	市内下南畑	3点

## 【展示写真一覧】

	写真名	撮影者(敬称略)	収蔵者(敬称略)	撮影地	撮影年
1	井戸掘り	内田テイ	富士見市立鶴瀬公民館	市内勝瀬	昭和20年代
2	発掘された近世の井戸	富士見市教育委員会	富士見市教育委員会	市内東大久保	平成5年
3	つるべ井戸	桜井幸治	桜井幸治	市内水子	昭和11年
4	はねつるべ井戸	八木橋信吉	さいたま川の博物館	寄居町	
5	かつての自噴井戸	当館	当館	市内東大久保	平成13年
6	井戸掘り	小山十策	志木市役所	志木市宗岡	
7	行水	埼玉新聞社	埼玉県立文書館	戸田市	昭和28年
8	人参洗い	荒井正雄	当館	市内水子	昭和20年代
9	魚とり	荒井正雄	当館	市内水子	昭和20年代
10	ミズグルマで田に引水	埼玉県立さきたま資料館	埼玉県立さきたま資料館	北川辺町	昭和45年
11	水車小屋	当館	当館	府中市郷土の森	平成12年
12	井戸神様	当館	当館	市内東大久保	平成13年
13	大山阿夫利神社	当館	当館	神奈川県伊勢原市	平成13年
14	上水道布設工事	富士見町(現富士見市)	当館	市内	昭和40年

## 【参考文献】

- 朝霞市博物館 2000 『第6回企画展 川と人々の暮らし』
- 出水 力 1987 『水車の技術史』 思文閣出版
- 内田正子 1977 「水と生活－揚水と導水の方法－」 志木市郷土研究会『郷土志木』第6号
- 大島曉雄 1986 『上総掘りの民俗』 未来社
- 大島忠剛 1995 『ポンプ随想－井戸および地下水学入門－』 信山社出版
- 尾崎征男 1996 「暮らしと言葉4」 エコシティ志木『「エコシティ志木」通信』96夏(第4号)
- 上福岡市立歴史民俗資料館 1998 『第14回特別展図録 川とともに生きる』
- 国土庁長官官房水資源部 2000 『日本の水資源(平成12年版)』 大蔵省印刷局
- 埼玉県 1987 『写真集 荒川』
- 〃 1988 『新編埼玉県史 別編1 民俗1』
- 〃 1991 『埼玉の民俗写真集』
- 埼玉県入間東部地区教育委員会連絡協議会 1983 『埼玉県入間東部地区の民俗 第6集～信仰・芸能・口承伝承の変貌～』
- 〃 1984 『埼玉県入間東部地区の民俗 第7集～民具～』
- 埼玉県文化会館 1969 『住居の歴史』 真珠書院
- 南畑公民館建設十五周年記念事業実行委員会 1978 『南畑公民館建設十五周年記念誌 南畑の戦後三十年のあゆみ』
- 富士見市教育委員会 1979 『ふじみの伝説・昔ばなし 資料篇(一)』
- 〃 1980a 『ふじみの伝説・昔ばなし 資料篇(二)』
- 〃 1980b 『富士見風土記』
- 〃 1984 『富士見市史 資料編1 自然』
- 〃 1988 『富士見市史 資料編7 民俗』
- 〃 1994a 『富士見市史 通史編 上巻』
- 〃 1994b 『富士見市史 通史編 下巻』
- 富士見市立鶴瀬公民館 1987 『第9期富士見市民大学 学習の記録』
- 〃 2000 『鶴瀬地域誌 わがまち鶴瀬』(編集は鶴瀬地域誌編集委員会)
- 水谷公民館新刊10周年記念事業実行委員会 1991 『水谷公民館新刊10周年記念誌 みずたに今昔』
- 水みち研究会 1998 『井戸と水みち』 北斗出版
- 栗東歴史民俗博物館 1998 『企画展 山・里・湖の村と暮らし－湖南の村落と水利用－』

**【資料提供者・協力者】**（敬称略、五十音順）

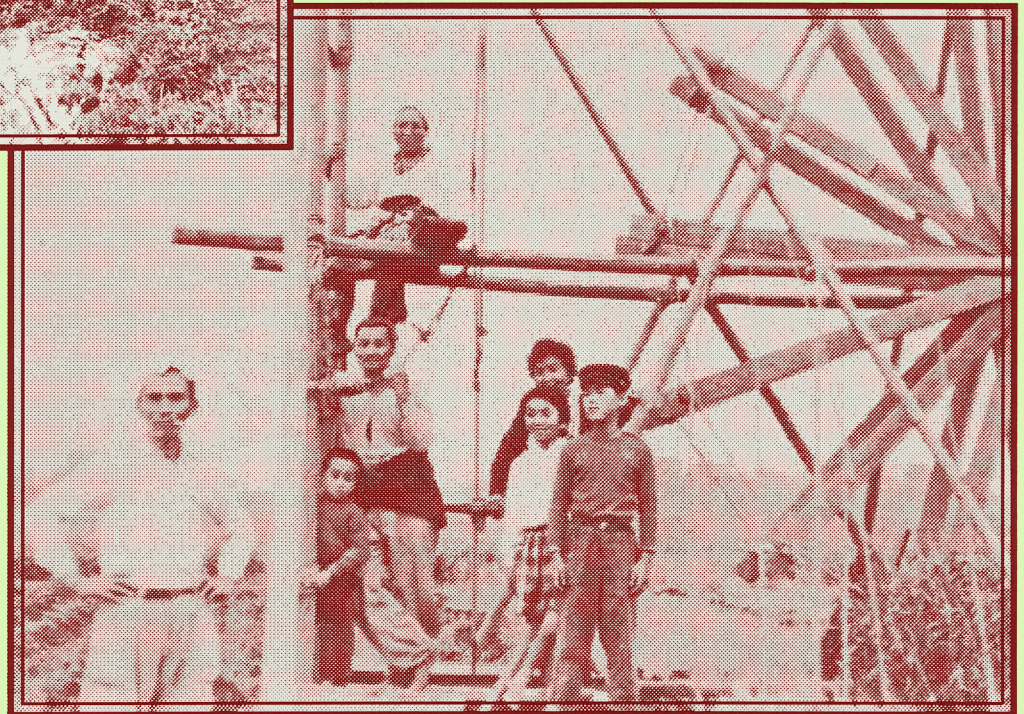
埼玉県立さきたま資料館、さいたま川の博物館、埼玉県立文書館、埼玉新聞社、志木市役所、志木市立郷土資料館、富田設備工業所（有）、富士見市教育委員会、富士見市立水子貝塚資料館、浅野久枝、荒井正雄、上田裕一、内田テイ、大久根茂、大澤誠、大澤綾、大館勝治、大薮裕子、小田部家秀、尾上かや、小野一之、金子ハル、小林将人、桜井幸治、玉田幸久、時田佐左衛門、富田治明、中野泰、原毅彦、増田辰夫、三浦久美子、八木橋信吉、柳下東三郎、矢部宇一、横田正志、横田千鶴子、渡井善雄、渡井多津子

平成12年度企画展  
「くらしの水～収蔵資料にみる富士見の水利用～」  
展示解説パンフレット

編集・発行 富士見市立難波田城資料館  
〒354-0004 埼玉県富士見市下南畑568-1  
電話 0492-53-4664 ファクス 0492-53-4665  
発行日 平成13年2月10日

令和2年1月26日改訂

表表紙写真 : 市内水子のつるべ井戸（桜井幸治氏撮影）  
裏表紙写真／上：市内水子での人参洗い（荒井正雄氏撮影）  
" / 下：市内勝瀬の井戸掘り風景（内田テイ氏提供）



なんぼたじょう  
**難波田城**  
FUJIMI MUNICIPAL MUSEUM